
平成ライダー大戦！？～時空を超える男たち～

レグサ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

平成ライダー大戦！?? 時空を超える男たち

【Nコード】

N4088X

【作者名】

レグサ

【あらすじ】

クリスマススイブに空から人が降ってきた?!そこから始まる戦い・・・・。無欲ホームレス男にハーフボイルド探偵、リントの言葉が話せない男、ピンボケカメラマン(笑)などが世界を超え、時を超え出会うとき何かが起こる——!バトルあり、シリアスあり、笑いあり『平成仮面ライダー!?? 時空を超える男たち』は、そんな物語です。

プロローグ 「とある少女の話」 （前書き）

どうも、レグサです。

平成仮面ライダー大戦！？！時空を超える男たち！の物語は、ライダーたちは原作通りですが、オリキャラが登場します。（オリキャラがライダーになることはありません）

このプロローグには、ライダーは出てきません。

ブローグ 「とある少女の話」

12月24日 17:00 ???

「お父さん、今日はクリスマススイブだよ！」

「うん、そうだね。」

パソコンに向かっていたお父さんが顔を上げる。そうだったか？つて顔している！

「もう、お父さんったら！今日はケーキ買いに行く約束だったですよ？」

自分から言ったくせに忘れちゃって・・・お父さんがもたもたしたせいで十分も待たされた。

「さあ、行こうか、ユー？」

「うん！」

クリスマススイブの夕方、たくさんの人が街を歩いている。すごい数だ。

「お父さん、ケーキ屋さんまで競争しようよ！」

「えー、絶対ユーが勝つだろ？」

「ヨーイ！どーん！！」

渋るお父さんを見無視して私は走り出した。

飛び出した先にトラックが走っているのを知らずに・・・。

「—————！！」

お父さんが届かない手伸ばしながら何か叫んだ。多分、私のことだと思う。

刹那、少女は光に包まれた。

「あ・・・れ？」

気が付くと自分は、立っていた。道路に飛び出したはずなのに道路の手前で止まっていた。

まるで時間が巻き戻ったみたいに

「お父さん？」

道路に飛び出した自分を助けようとしたお父さんがいない。

「お父さん！？お父さんっ！お父さんっ！..！」

あのトラックが何もなかったかののように目の前を通り過ぎた。

でも、お父さんはいなくなった・・・。

「どこに行っちゃったの・・・？」

ふと、服のポケットに違和感を感じた。

「あれ？何だろう、これ」

一枚のチラシ、ハートとカリボンがプリントされていて大きな字で『鳴海探偵事務所』と書いてある。

「なるうみたんていじむしょ？」

探偵って、確かシャーロックホームズとかの？と思う。

こんなの一度も見たことがない。でも、持っていた・・・。

「ここに行けって、こと？」

なぜだか誰かが頷いてくれたような気がした。

~~~~~

少女は、走った。

やがて古びた玉屋「かもめビリヤード場」にたどり着いた。

「お父さん……」

少女の小さな唇がきつく結ばれる。彼女は、迷わず二階へと上がっていった。

目指すのは、鳴海探偵事務所――

二人で一人の仮面ライダーは知る由もなかった。

この少女の父親探しによって大きな事件に巻き込まれることを……

## プロローグ 「とある少女の話」 (後書き)

次回予告！

仮面ライダーのトップバッターは、二人で一人の仮面ライダーだ！

「僕的には・・・当たると爆発！ロシアンルーレットケーキがいいねえ」

「私、聞いてない！覚えてろおおおおお！」

「はんぶんこじゃねえよ！」

次回 「風の街に揺めくオーロラ」

## 第一話 「風の街に揺らめくオーロラ」 (前書き)

はい、レグサです。

今回から仮面ライダーたちがバリバリ出てきます！

## 第一話 「風の街に揺らめくオーロラ」

12月24日 19:02 風都風花町

クリスマスイブ

その単語を聞くだけでワクワクするのは、子供だけでなく大人もだろっ。

しかし、左翔太郎は複雑な気持ちでその日を迎えていた。

なぜ？

職場でもあるココをキンピカモールやオーナメントで飾り立てるとせつかくのハードボイルドな雰囲気が出ないからである。

飾りをつけているのは、自称浪速の美人所長の鳴海亜樹子だ。

所長だけあって翔太郎は、逆らえない。

亜樹子の飾り付けの様子を見てげんなりしている彼もケーキのカタログを見ている。

彼は、ハードボイルドでなく『ハーフボイルド』なのだ。ここ、試験にです。

~~~~~

12月24日 19:10 風都タワー前

すっかり暗くなった空、街はクリスマスの電飾で輝いている。

「見て！今、空が光らなかった？」

「えー！？もしかして、流れ星？」

一組のカップルが仲良くベンチに腰かけて夜景を楽しんでいる。

どうやら、彼氏のほうが何か空で光ったのを見たらしい

「あ！また・・・」

「どこどこ？」

「あそこに」

「んー？って何アレ！？」

「オ、オーロラだよな？」

「オーロラ・・・ね。間違いなく」

「オーロラってさ、北極とか南極でしか見れないはずだよな・・・」

「うん。なんか不気味ね・・・」

「ああ・・・、せつかくのクリスマススイブなのになあ・・・」

彼らが見たのは、間違いなくオーロラだった。

モノクロのオーロラが遥か遠くで揺らめいていた・・・まるで何かを誘うように

~~~~~

12月24日 19:30 風都風花町

「だ〜か〜ら〜！このスペシャル生クリーム地獄 クリスマスケーキにする！」

「いんや、このハードボイルドなスイートチョコDEパライスクリスマスケーキだろ！」

「僕的には・・・当たると爆発！ロシアンルーレットケーキがいいねえ」

翔太郎は、クリスマスケーキを何にするかを亜樹子と相棒のフィリップとでもめていた。

「大体、ハードボイルドって言うけど・・・ただ、チョコケーキが食べただけでしょ!？」

「なにい!？お前こそ選んだケーキの生クリーム地獄ってなんだよ!？どんなケーキだよ、それ!？」

「生クリームでできたケーキ」

「ケーキじゃないだろ!！」

「ケーキだもん」

「そんなにもめるなら、間を取るつもりで僕のにしないかい？」

「爆発したくないから、いや」

二人が拒否する。

「死ぬ威力じゃないから、痛いだけだよ？」

「そこかい!！」

二人が仲良くつつこんむ。

「とりあえず、フィリップのを却下するのはいいか？」

「許す」

「亜樹子ちゃん!？そ、そんな・・・」

フィリップはケーキを却下され、ベットでふて寝し始める。

「で、俺に譲る気はないのか？」

「そつくりセリフ、そのまま返すわ!」

両者の目から火花が散っているように見えるのは、気のせいだろうか？

「ん？今、ノックが聞こえたような・・・？」

「はっ!お客さん!？」

小さなノックの音に気が付いた翔太郎、亜樹子が急いで扉を開けると・・・

「あ、あの……『なるうみたんていじむしょ』ですか？」

長い髪と大きな瞳がかわいい少女が立っていた。

「え？そ、そうですよ……」

鳴海を『なるうみ』と読まれ、戸惑った亜樹子は訂正するのを忘れてしまった。

「依頼つて、できますか？」

「もちろん！愛犬の搜索などなんでも！あっ！座りますか？」

「は、はい」

少女から見たら大の大人に敬語を使われて、少女も固くなってしまっている。

「依頼はなんでしょうか？」

と翔太郎は、問う。

「えつと……、私のお父さんを探してほしいんです」

「お父さんを？」

「はい……。今日の夕方に一緒にケーキ買いに行こうって、出かけて……」

「はぐれただけってないよな、お嬢さん？」

「絶対、そんなことない！お父さんは、いつでも私の傍にいてくれたのよ！」

翔太郎の問いを少女が声を荒げて、否定する。心なし目が潤んでいる、今にも泣きそうだ。

「翔太郎くん……」

隣の亜樹子が目で謝れと言っている。

「ご、ごめんよ……」

「それで、ケーキ買いに行く途中でお父さんがいなくなっちゃったの？」

「突然、消えちゃった……」

「消えたって、パツて感じにかな？」

少女が頷く

「・・・・・・・・・・」

それを聞いて翔太郎の顔が陰くなる。

最近、妙な失踪事件が多いと照井が言っていた。どの事件も人が蒸発したようにいなくなっている。

その事件は、発生することのなはず『オーロラ』が目撃されているとのこと、その超常現象から照井はドーパントのせんが強いと言っていた。

「人探しをするときは、情報がいる。そのためにお嬢さんに色々質問してもいいか？」

少女が頷く

「お父さんの名前は？」

みきたてつろう  
「樹田哲郎」

という感じで、翔太郎は人探しに必要なことを少女から聞いていった。

「オーロラって見なかったか？」

「オーロラ・・・ですか？」

突然、父親探しに関係ないようなことを聞かれ眉を寄せる少女。

「オーロラは、見なかったけど・・・」

「けど？」

「何か光っていた気がするの」

「そうか。じゃあ、お嬢さんのお父さんを探してくる。それと・・・亜樹子、フィリップ起こしておいてくれよ？」

「えっ！？翔太郎くんがやって・・・よ？」

反論する亜樹子だが、翔太郎はもう外へ出て行ってしまっていた。

「私、聞いてない！覚えてろおおおおお！」

その後、亜樹子の声は街全体を震わせと謎の雄叫びとして伝説になったとか、ならなかったとか

くくくく

「と、いうことだ。ウォッチャマン、何かそれについての情報はあるか？」

「もちろんだよ、翔ちゃん！」

情報屋のウォッチャマンに街に現れるオーロラの情報をもらいに来た翔太郎

「最近、それに関する掲示板が増えているんだけど、特にこの『風都の新 都伝』っていうのがいい情報が載っているよ」

「『風都の新 都伝』が掲示板の名前か？」

「そうそう、元々は都市伝説について語る場所だったんだよ。しかもその掲示板、実際に失踪した人が書き込んでいたらしいよ」

「ふうん、分かった。ありがとな」

翔太郎は、ウォッチャマンに封筒を渡す。

どーもと言いつつ中身を確認したウォッチャマンは、笑顔で去って行った。

「えーっと、『風都の新 都伝』と・・・」

スタックフォンを使って掲示板を見始めた翔太郎、すぐにオーロラに関する物を見つけた。

以下、『風都の新 都伝』より抜粋

「最近、オーロラが風都の空に現れるって本当ですか？」

「その話知ってる！そのオーロラ灰色なんだって！」

「本当、自分みたつていう人知ってるよ」

「みてみたいなあ、どこでみたか教えてください（＾ω＾）」

「やめたほうがいいよ？見たら消えちゃうらしいぜ」

「ええーΣ（。Д。；；）マジで！？」

「その人、次の日から学校来なくなった」

「見た奴が全員消えるってわけじゃあない。手紙もらづらい、消える前に」

「『招待状』。〇〇様　ゴシヨウタイイタシマス』って内容らしい」

「なんでそんなに詳しいの（。ω。；）ヤバイ」

「ウソだろ？顔見えないからって勝手なこと書くな」

「ホントだよ」

「灰色のオーロラは、招待状を持った人間を異次元に連れ去る」

「『招待状』か・・・」

翔太郎は、一度探偵事務所に戻ることにした。

少女が父親のことをどこまで知っているかわからないが、『招待状』を受け取ったかどうか聞いてみる価値はありそうだな、と考えたからだ。

「それにしても、風がないな」

風都は夜でも風が吹く。しかし、道端の風車かざぐるまから風都タワーの風車ふうしゃまでその動きを止めている。

風都に何か起こっているのか・・・？という疑問が翔太郎の頭をよぎったのであった。

~~~~~

「お父さんの手紙？」

「ああ、前日とかに手紙を受け取っていなかったか？」

「……あ！もらってましたよ。このくらいの細い封筒に入ってた」

少女の仕草からよくある封筒より細長いものであることが分かった。

「でも、その封筒……真っ白だった」

「真っ白？」

「封筒に切手も住所も書いてなかった」

「そうか……」

「翔太郎くん？」

少女から父親が『招待状』のような奇妙な手紙を受け取っていたことを聞き出した翔太郎に亜樹子が笑顔で呼びかけてきた。

「あ、フィリップ起こしてくれたか？」

「もつちろーん」

と言いながら笑顔で一回転する亜樹子

「フィリップ、検索頼むぜ！」

「ああ、もちろん」

ベットに座っていたフィリップが立ち上がり両手を広げる。

フィリップの周りの空気が変わる、地球の本棚^{ほし}に入ったようだ。

「『灰色のオーロラ』『招待状』『異次元』だ」

「キーワードは、『aurora of gray（灰色のオーロラ）』、『invitation card（招待状）』、『another dimension（異次元）』」

フィリップの目の前にあった膨大な数の本が消えてゆく

手元に残ったのは『masked riders（仮面ライダーたち）』という本のみだった。

「あったか？」

「あったけど……。翔太郎、鍵がかかっているみたいだ」

本を開こうにも蝶番でしつかりと閉じられている・・・

「はあ！？『鍵』がいるのか？」

「この場合の『鍵』は、何かきっかけがいるみたいだね」

「お父さん・・・」

翔太郎は、せつかくの手掛かりが水の泡同前になったことより、少女が悲しそうにうつむくを見るほうがつらいと感じた。

~~~~~

「・・・・・・・・」

傍らにハードタービュラーを止めて風都タワーから街を見回す翔太郎、こうなれば灰色のオーロラを見つけてやる！と事務所を飛び出したのだ。

「翔太郎、焦る気持ちはわかる。でも、今日はオーロラが現れないっていう可能性もあるからね？」

「・・・・・・・・」

『確かに。現れるって可能性もあるってことだね』

ベルトの装着によりフリリップと意思疎通ができる。

無線やケータイよりも便利だがお互いに何を考え、思っているかが筒抜けということが欠点だ。

「来るなら来いよ、オーロラー！」

何を思ったのか、突然叫ぶ翔太郎

その声が天に通じたのか、街のはずれのほうにオーロラがゆっくり

と降り始めていた。

『日本の神様は、八百人いるっていうけど・・・まさかねえ』

「はっ！そんなの一人でも聞いてくれたらいいぜ！フィリップ、変身だ！」

『cyclone』『joker』

「変身！」

『cyclone』『joker』

すさまじい風と共に翔太郎は、風都を守る戦士——ダブルに変身した

「行くぜ」

『翔太郎、急いだほうがいい。すぐに消えてしまつかもしれないよ』  
「わかってら！」

タービュラーに乗ったダブルは、クリスマスイブの風都の空を飛んでいく。

途中で赤い服を着て、トナカイにそりをひかせているおっさんを見たような気がしたが、それを気にしているところではない。

丁度、オーロラの真下に来る。

それにしてもでかいな・・・と翔太郎が思っていると

『ん？オーロラから何か・・・』

サイクロンサイドのフィリップがタービュラーの方向を変える。

そして、ダブルは見た。

赤いドーパント？と落ちていく人を

「やっぱりドーパントの仕業だったか！」

『まずは、落ちている人を助けないと翔太郎？』

「ああ、フィリップ」

『間に合いそうもないから、ルナメモリの力を使おう』

『luna』

『luna,joker』

ルナジョーカーになつたダブルの片腕が伸びる、あとちょっとが届かない

「届けえ！」

翔太郎の気合の声とともに足に手が届いた

「セーフ」

『翔太郎、もう一人いるよ！』

「どこだ！？」

少し離れた上空に人影が見える

『どうする、翔太郎！？』

「迷つてゐるひまはねえ！このまま・・・！」

人の足をもつたまま、腕をさらに伸ばす。

器用にも落ちてゐる人に腕を巻きつける、もちろん手には足を持つたまま

「間一髪だぜ・・・」

『翔太郎、バランスが崩れて僕たちも落ちてゐるけど』

右側に人二人分余計に重たくなつてゐるため、タービュラーが傾いてしまつてゐる。

「お、落ちる！？」

「おい」

「ちよ、ちよつと待つてくれ！今、落ちてんだよ・・・つて！？」

いつの間にかタービュラーの左翼にガラの悪そうな男が立っている。

「馬鹿を助けた礼だ。これでましになるだろ、はんぶんこ？」

男の言う通り、傾きがましになった。

てこの原理のおかげでなんとかなつたようだ。てこの原理、ここ試験に出ます。

「誰だか知らねえけど・・・助かつた・・・」

『……（翔太郎、この男。怪しいよ）』

「（確かに……、どこから湧いてきた？）」

怪しがる二人をよそに男は、反対側の宙ぶらりんの人に怒鳴る。

「おい！起きろ、馬鹿！」

「あ、あれ……ここは……」

男の声に足だけつかまれて宙ぶらりんになっている青年が意識を取り戻したようだ。

「俺、助けてもらったの？ありがとう、はんぶんこさん……」

頭に血が上っているのか、声が小さい。

「はんぶんこじゃねえよ！」

『僕たちは、二人で一人の仮面ライダー……』

「『ダブル』だ！」

「『仮面ライダーダブル？』」

謎の男と青年が首をかしげる。

今だ落ちてきたもう一人は目を覚まさず……。

## 第一話 「風の街に揺らめくオーロラ」 (後書き)

次回予告！

空から落ちてきた青年たち、彼らはいったい何者なのか！？

「なんで空から落ちてきたんだ？」

「特別な日ってこと」

「・・・お前、なんか企んでるだろ？」

ラストで登場したはずの誰かさんは空気になっているぞ！

次回 「〇の回想ノベルトを無くしたライダー」

## 第二話 「Oの回想／ベルトを無くしたライダー」 (前書き)

どうも、レグサです。

今回の話は、無欲ホームレス男と赤い鳥が中心です。

## 第二話 「Oの回想／ベルトを無くしたライダー」

12月24日 22:45 風都風花町

クリスマスイブにやって来た少女は、突然消えた父親を探して欲しいと依頼してきた。

彼女の父親は、奇妙な手紙——『招待状』を受け取っていた可能性がある。

『招待状』を受け取った人間は、『灰色のオーロラ』によって別の世界に送られてしまう……らしい。

別の世界に送られるかどうかは、確かめるすべがないので真偽は不明。

しかし、『招待状』と『灰色のオーロラ』は、関係があるようだ。

そして、俺たちは『灰色のオーロラ』の確認に成功した……が、人が二人も落ちて来たのであった。

赤いドーパントらしいものも確認したが、人命救助が優先。もちろん、ドーパントを見失った。

「一体何がどうなってんだよ……」

とりあえず、事務所に戻ってきた翔太郎は頭を抱えてつぶやく

「俺が聞きたい」

落下から助けてくれたガラの悪い男……怪しい……

「ここは、どこなんですか？」

翔太郎たちが助けた二人のうち、ガラの悪い男の知り合いと思われる青年が問う

もう一人は、完全に気絶しているのでベットに寝かせている。

「ここは、風都。心地よい風が吹く街さ」

「風都・・・？」

青年は、そんなところあつたつけなという顔をしている。

「で、名前は？」

「あ！俺、火野映司つていいいます。えーっと、こっちがアंक」

「俺は、左翔太郎。相棒のフィリップと探偵をしている」

「私、鳴海亜樹子。ここの所長よ！」

自己紹介をする青年——映司

「本当、助かりました。ありがとうございます。」

「いえいえ、当たり前のことですよ」

「亜樹子、お前何にもしてないだろーが」

「だまらっしゃい！」

翔太郎の頭を亜樹子がスリッパでたたいている、フィリップは二人を無視して気になっていたことを映司に聞いてみることにした。

「君は、どうして空から落ちてきたのかい？」

「えーっとそれは・・・」

~~~~~

12月24日 21:50 夢見町クスクシエ

クリスマスイブということで夕方から賑わっていた店も閑散として
いる。

「はー、映司くん。お疲れ」

「お疲れ様です、知世子さん」

「すごく疲れちゃったみたい・・・肩が重たいわ」

「昼間に踊りすぎたんですよ」

「うん、あれはちよつとやりすぎちゃったわね」

店長の知世子は、昼間にサンタのコスプレしてサンバを踊っていたのだ。

なぜ、クリスマスイブなのにサンバを踊った？とは、つつこんでいない。

「俺、片づけ全部やりますよ？」

「えっ！？いいの？」

「はい」

「じゃあ・・・あれをしまつて・・・これをだして・・・」
店の細かい装飾の変更や仕込みの有無を伝えて知世子は店を後にした。

「じゃあ、お休み」

「お休みなさい」

知世子を見送った映司は、厨房をあらかた片づけると冷蔵庫を開け、中にある両手に乗るくらいの箱を取り出し二階へ上がる。

「アंक、入るぞー」

「・・・」

部屋の片隅に置かれたソファの上に大きな赤い鳥が寝転がっている。くつろいでいるわけでなくだるそうに己の翼をいじくっている。

「アंक、今日はクリスマスイブだね！」

小さな箱を持ちながらテーブルを部屋の隅からアंकの前まで引き寄せる。

「それが？」

「特別な日ってこと」

「お前ら人間のだろーが」

アंकの文句をスルーして映司はテーブルの上に箱を丁寧に置いた。
「特別な日だからアレも特別にしてみただけど・・・」

映司は、なぜか笑いながら箱のふたを開ける。

「・・・これって、鴻上の奴が作っていたのだろ？」

「うーん、ちょっと違うかな？」

箱の中から小さなケーキが出てきたのだ。それを訝しげに見るアंक

ク。

「はい、アंक」

「食えってか？」

映司がアंकにスプーンを差し出す。

「これを見ていると鴻上の奴を思い出す・・・」

「まあ、そんなこと言わずに」

「・・・、お前何か企んでるだろ？」

「えっ？そんなことないけど」

「顔に書いてあるぞ」

先ほどから映司が笑顔なのだ。笑顔といえいいがニヤニヤしているといった方がいいだろう。

「これ、実は比奈ちゃんが作ってくれたんだ・・・アंकのために」

笑っていた顔から一遍して真剣な顔になる映司

「本当は比奈ちゃんが作ったことはアंकが食べてから言おうと思っただけなんだ」

「といいつつ、アंकにスプーンを押し付ける。」

「だから、アंकはちゃんと食べないと・・・比奈ちゃんに『ふんにゅ』されるぞ」

「なっ!?!?・・・た、食べるとするか・・・」

比奈の『ふんにゅ』に脅されて渋々食べることにしたアंक、人間態となりケーキと対峙する。

「そうでなくっちゃ、ね？」

笑顔に戻った映司に見守られつつ、ケーキを一口・・・

「冷たい・・・？」

「でしょ！それ、アイスクリームって言って、アイスでできているんだよ」

「先に言えよ」

と文句を言いつつケーキを食べ始めるアंक。

「さてと、片づけの続きをしなきゃね！アंक、明日比奈ちゃんに
お礼言えよ？」
「考えておく」

~~~~~

「これで片付けはいいかな？」  
門の外に出て飾りつけをチェックするが片づけといっても看板をし  
まうだけの簡単なお仕事なのだ。

「火野映司様ですか？」

背後から声をかけられ振り向くと郵便屋さんが立っている。  
制服に帽子、黒い革靴に自転車という一昔前の郵便屋さんであった。

「あ、はい」

「お届け物です」

「どうも・・・」

切手も住所も書いてない、細長い白い封筒を受け取った。

「あの・・・」

「って、居ない・・・？」

目を離したのはほんの一瞬だったのに、郵便屋さんはすでにいなく  
なっていた。

夜の闇から微かに錆びた自転車のこぐ音が聞こえるだけ・・・  
「・・・・・・・・」

何かおかしいと思いつつ二階に戻る。

「なんだ？手紙か？」

すでにケーキを食べ終わったアंकが問う。

「うん、不思議な郵便屋さんにもらった・・・」  
引き出しからカッターを取り出すと封筒の封を切る。

「『火野映司様　ゴシヨウタイイタシマス』？招待状かな・・・？」

「映司、なんか来るぞ！」

何かを察知した天井を睨むアंक

そして、天井から揺らめく何かが迫ってきて・・・いきなり空に  
投げ出された

~~~~~

「その揺らめく何かが『オーロラ』だ。実に興味深い・・・」

「そういえばアंकくんって、外国の人？珍しい名前だね」

翔太郎をスリッパで叩いていた亜樹子が問う。

「そ、そう！外国生まれなんだよな、アंक？」

いきなり映司が慌て出す。

「ふん・・・」

「そういえば、お前空から降ってきたはずなのに平気なんだよ？」

「俺は、にんげ「わああああ！」」

アंकの言葉に映司が割り込む

「いいだろ。ホントのことって減るもんじゃないだろ」

「（まずいって、いきなり人間じゃありませんだなんて・・・！）」

「（怪しい・・・）」

小声で注意する映司の様子を見て翔太郎はさらに不審がる。

「（おい、フィリップ。あいつがドーパントである可能性は？）」

「（十分にあるよ。大体、あの時タービュラーは傾いて凡人が生身で立つてられる状態じゃない……。ガイアメモリの副作用で肉体強化されているのかもしれないね）」

「（火野っていう奴は、共犯者かもしれないな……。）」

「（まあ、あくまで仮説だよ。そこんところわかってるよね、翔太郎？）」

「（ああ……。）」

「なんかこそこそ話してるわ……。）」

なんだか仲間はずれな亜樹子は、ふとあることに気が付く。

「あれ？ユーちゃん？」

依頼人の姿が見当たらず、彼女が座っていたところにメモがある。

『家に帰るので、何かわかったら連絡してください。0901……。』

『

電話番号と思われる数字が書いてあった。

「そっいえば……。映司、お前ベルトは？」

「え？あれっ！？」

空から落ちたりと色々あったのですっかり忘れていた映司

ポケットの中を探るがパンツと小銭しか出てこない

「無くしたとは、言わないだろうな？」

「えへへ……。無くしました。」

照れ笑いする映司

「探しに行つて来い！」

「は、はい……。）」

「どうした？」

「俺、大切なもの無くしちゃったみたいで」

「……一緒に探してやろうか？お前、この街のことを知らないだろ」

何か少し考えて翔太郎が映司に提案する。

「すごく助かります」

~~~~~

12月24日 23:59 風都風花町

こうして、謎の一日が終わりを告げた。

## 第二話 「Oの回想／ベルトを無くしたライダー」（後書き）

次回予告！ 第三話 「ウサギと列車と鬼」  
オリジナルキャラのユーちゃんが主役だ！

『ねえ、僕と契約してくれないかな？』

「イマジンの臭いがしたと思ったら・・・誰だ！てめえ！」

「はい、どうやってパスを手に入れたか知りませんが・・・よほどのことがない限り許可しましょう」

不思議な列車に乗っている赤い鬼が登場しますよ。

### 第三話 「兎と電車と鬼」(前書き)

はい、レグサです。

今回は、ユーがメインで、題名の通りあの人達がでてきますよ。

### 第三話 「兎と電車と鬼」

12月24日 23:07 ???

「お父さん・・・」

独りで夜道を歩いて帰ってきたユ一、家についても彼女の父親はいなかった。

「・・・」

ユ一は今、父親の部屋にいる。乱雑に置かれた書類、何台ものパソコン、何かの装置・・・小さな研究所のような部屋。

「お父さん、ケータイ置いて行っちゃったのかなぁ・・・」

何度も電話をかけても一向につながらないのだ。

ふと、一台のパソコンがユ一の視界に入る。

画面に表示されている何かの設計図と数式ではなく、キーボードの下に何か挟まっているのが目に留まった。

「なんだろう？」

そういえば・・・今日の朝、父親がこのパソコンを使っていたことを思い出しながら挟まっている何かを引っ張り出す。

「パスケース？なんでこんなものが・・・？」

出てきたのは黒いパスケース表面にTのような模様が描かれている。

『それは、ライダーパスっていうんだよ』

ユ一以外誰もいないはずの部屋に声が響く。

「だ、誰！？」

『僕は僕であつて。それでしかない。』

「・・・？」

姿なき声が少し寂しそうに言う

『Wow！ライダーパスを持っている子に会えるなんて！君は、特

異点なのかい？」

「らいだーぱす？とくいてん？何、それ・・・？」

「何にも知らない？」

「ていうか、できなさいよ！」

相手が害がないのがわかると少し強気になるユー

「うーん、出てきたいのは山々だけど・・・こんな姿見せられないよ」

「どついう意味？」

「僕が僕じゃないから」

スツと光を放つものが現れる。

「ひ、人魂！？あなたお化け！？」

「お化けじゃないよ。」

「じゃあ、何？」

「I don't know・・・僕はなんだろう？」

「・・・」

目の前の人魂は、頼りなさげに揺れている。息を吹けば飛んでいきそうだ。

「ねえ、僕と契約してくれないかな？」

「はっ！まさか・・・」僕と契約して魔法少女になってよ？」ってこと！？」

ユーの脳裏に某魔法少女のアニメのワンシーンが流れる。

白い猫のような生物が少女たちと契約するあのシーンが・・・。

「いや、それは違うから・・・。契約の条件は、君の願いを一つ叶える為に力を貸してあげる代わりに僕に姿をあげるってところかな」

「お願いを叶えてくれるの・・・？」

「僕は、魔法使いとかそんなじゃないよ。But、でも、力を貸してあげる・・・君の願いを叶えてあげるために」

「じゃ、じゃあ・・・私のお父さんを探すのを手伝ってくれる？」

『君がそれでいいならOK。僕は、そのために力を貸してあげるよ』  
「契約する」

ユーの瞳が真直ぐ人魂を見つめる。

『Yes、それがいいね。でも、途中で契約を破棄するのは無しだよ？お願いを変えるのもダメ・・・それでもいいかな？』

「うん！」

『じゃあ、契約完了！僕は、君から姿を貰うでしょう』

嬉しそうに人魂が宙を舞うとユーの中に入り込んだと思ったたら服の間から砂がこぼれる。

「え！？ちよつと！何やってるの！？」

『お？やっぱり、特異点だったのか。』

声の主は何かに納得したようだ。

「ちよつと、話を聞いているの！？」

『Sorry・・・今から出るから』

淡い光を放つ何かから飛び出し、みるみる形をとっていく。

「How do you do、お嬢さん？つてところかな」

「う、うさぎ！？」

目の前に現れたのは、ピンクの燕尾服を着た青い瞳のピンクのウサギ？が立っていた。

「君のイメージしたものの姿を貰ったけど・・・なかなかいいねえ」

「私のイメージ・・・？」

「That's right！君は、『Alice in wonderland』のウサギをイメージしてくれたんだ。」

「ありすいんわんだーらんど？」

「不思議の国のアリス、さ」

おもむろにウサギが壁にかかっている時計を見る。

「いけない・・・時間だよ、アリス！『時の列車』に乗ろう！Hurry up！！」

「え？」

「急げ！急げ！」

慌て出すウサギは、ユーを小脇に抱える。

「きゃあ！何するのよ！」

「You don't angry, please? 乗り遅れちゃうからね」

「英語、解んないし！」

ユーが今更なことを叫ぶが、構わずウサギは部屋のドアを開ける。  
そこには……

「十一時十一分十一秒……間に合ったね」

「な、なんで……電車が？」

見たこともない形の電車らしいものが止まっていた。

「誰が乗ってるかな」

「これに乗るの？」

「Yes！」

ウサギは乗り込むとユーを下してあげる。

「でも、切符もってないよ」

「この電車の乗車券は、そのライダーパスの中にある」

「この中に？」

そんなことを話している間に扉が閉まり、ゆっくりと動き出す。

「きれい……」

あたりが光ったかと思うと不思議な空と砂漠のような光景が広がる  
ところに電車が出る。

「イメージの臭いがしたと思ったら……誰だ！てめえ！」

突然、車両から赤い鬼が出てくる。

「臭いって、ひどいなあ。君こそ誰？」

ウサギと鬼が対峙する。

「（あわわわ・・・、無断で乗っちゃ駄目だったんだよ）」

ウサギの後ろに隠れて小声で言う、ユー。

「（Don't be afraid、心配しないで・・・）名前を聞くなりまず、そっちから名乗りな？」

「けっ！オレはモモタロス！」

モモタロスと名乗った鬼は、ぶっきらぼうに答える。

「僕の名前か・・・（僕の名前、君が決めてくれない？）」

「（えっ！？名前、無いの？）」

「（Yes）」

「（え、えーっと・・・クリス、とか？）」

「（Great!）僕はクリス。この子の契約者」

「あ？契約済みなのかよ・・・何が狙いだ？」

「モモタロス！何してんのよ！」

モモタロスがやって来た車両から同い年ぐらいの女の子が飛び出してきた。

「おう、ハナクソ女！変なブベラッ」

モモタロスが宙を舞い、横に三回転したところで地面に落ちた。

もちろん、飛び出してきた少女の手によって・・・

「Wow・・・」

「う、うわぁ・・・」

さすがに凍りつく二人

「あれ？あなた達は・・・？」

~~~~~

「それでは、父親を探すためにやってきたのですね？」

目の前の「デンライナーのオーナー」と名乗る、中年の男性が二人に問う。

「はい……」

「ちよつと、チケットを拝見……」

「？」

「（ライダーパスの中のカードを出して……）」
戸惑うユーにクリスが助言してくれる。

「えーつと、これですか？」

「いかにも、拝見しますよ。おや……これは……」
オーナーが眉をひそめる

「どうしたんですか、オーナー？」

モモタロスに鉄拳制裁していたハナと名乗る少女が問う。

「いえ、なんでもありません。これはお返ししよう。」

「あ、あの……私たちこの列車に乗っててもいいんですか？」

「はい、どうやってパスを手に入れたか知りませんが……よほどのことがない限り許可しましょう」

「よかったね、ユーちゃん」

「ありがとう、ハナちゃん」

「んー、女の子同士は仲良くなるのが早い！」

すっかり仲良くなった二人を見てクリスが呟く

「ねえ！ウサギさんはコーヒー好き？」

「コーヒーか……。どちらかと言えば紅茶だけど飲むよ？」

「このコーヒーすごくおいしんだよ！」

「Oh！それは是非飲んでみたいね」

リュウタロスが無邪気にクリスに話しかけている。

そんな光景を見てウラタロスがモモタロスに言う。

「センパイ、あのイマジンちゃっかり居座っちゃってるね」

「たれ耳！」

「僕の名前はクリスだけど・・・何？赤鬼君」

「鬼じゃあねえよ！俺の名前はモモタロスだ！あー！！また、変なのが増えやがった！」

「What!？変なのとはひどい、君の方がよっぽど変だ」

「確かに」

ウラタロスが笑う

「何をー！！」

二人の間に一触即発な雰囲気が始めたとき

「ただいま」

仮面ライダーは帰ってきた。

第三話 「兎と電車と鬼」(後書き)

Open your eyes for the next
φ、
s . . .

「．．．．怪しさ満点!!」

「言いたいのはそれだけですか？」

突如、現れた謎の男たち．．

『化物．．．？我々はオルフェノク、人類の進化した形態なの
です!』

ドーパントとは全く違う異形——敵？

「俺が変身する!!!」

次回、第四話「Kのベルトノ落し物はどこにある？」

第四話 「Kのベルトノ落し物はどこにある?」 (前書き)

はい、レグサです。

Kのベルトの『K』ってなんだ?と思う方!
それは読めばわかります。

第四話 「Kのベルト／落し物はどこにある？」

12月25日 08:45 風都風花町

12月24日、クリスマスイブにオーロラが空に現れ、そこから人が降ってきた。

奇妙な郵便屋から『招待状』を受け取った火野映司と名乗る青年とアंकという金髪の男。

そして、今だ目を覚まさない青年……。

後でわかったことだが知り合いらしいガラの悪い男と『夢見町』にいたらしいのだが……フィリップに検索させても何も引つかからなかった。

すなわち、『存在しない』町から彼らは来たということになる。

彼らの話が本当ならば、だが……どうもガラの悪い男——アंकが怪しい。

『灰色のオーロラ』の犯人かもしれないので彼らを見張ることにした。

まあ、あくまでも可能性の話なんだが……

~~~~~

「おはようございます、左さん」

翔太郎が机の前で物思いにふけっているとガレージの方から映司がやって来た。

「おはよう」

「昨日は布団とかありがとうございました。迷惑ばかりかけちゃって・・・」

昨日の夜、とりあえず無くしものを探すのは明日にしようということにしてガレージの方で寝てもらったのだ。

「あれ？あのアンクって奴は？」

「ああ、なんか起きたらもういなくて・・・。あつ！アイツのことなんで心配しなくても大丈夫です。」

別の意味で心配なんだけどなあ・・・と思う翔太郎。

「あの・・・昨日俺達が落ちてきたあたりにあるかもしれないんですけど」

「ああ、そこからあたってみるか。ついでに調べたいこともあるかな」

徒歩で行くこと数十分・・・

街はずれの廃工場までやって来た。丁度、このあたりの上空から彼らが落ちてきたということになる。

「ここらへんなんだが・・・」

「・・・・・・・・・・」

すでに映司はそこら辺をのぞいたり、ひっくり返し始めていた。

「どうだ？」

「ここにはなさそうですね……。」

と言いつつも、まだそこら辺を探し回っている。

余談であるが、無くしものを探すとき、見つけるまでと気が済まないと感じる人はいるだろうか？

それは性格云々の話でなく、人間の『搜索本能』だから、だそうだが、つまり、『物を探し出す』という本能に突き動かされているために、そう感じるのだ。

「……。」

映司の視線が廃工場の焼却炉に向いている。

かなりの大きさで一時にたくさんものを焼却していたのだろう。工場が廃棄されることになってから中の焼却物が放置され、錆びつき、腐食され、気味の悪い洞窟のようになっていて。

「まさか……、あの中行くつもりか？」

「いや、なんか……。違和感がする、ような……。」

「違和感……？」

「やっぱ、何でもないです。気にしないでください。」

「あ、ああ」

また、映司は探し始めたが、翔太郎は焼却炉の中が気になっていた。何を思ったのか焼却炉の中を覗き込む翔太郎

「!？」

焼却炉の廃材の隙間から入るはずのものが目に入る。白い灰を被った……帽子、黒いコート、ズボン。まるでそこに人がいたようにきれいに置かれている。

近くに落ちていたカバンから持ち主のものらしき手帳やペットボトルが転がっている。

手を入れて手帳を引つ張り出すとそこに名前が書かれていた。

「西藤四郎!？」

白い灰が服に着くのも構わずに自分の手帳を出す。

照井から『灰色のオーロラ』で失踪した人間の名前を聞いていたが・  
・

『西藤四郎 帽子に黒いコートを着用』

間違いなく灰まみれの服は、西藤四郎のものである……。

しかし、彼はどこに行った？

まるで灰が人だったように感じた翔太郎は、思わず後ずさる。

「貴方は、ここで何しているのですか？」

いつの間にか翔太郎の背後に白いロングコートを着たオールバックの男とどこにでもいそうなサラリーマンが立っている。

「……怪しさ満点!!」

「言いたいのはそれだけですか？」

「つつこまないのかよ……!!……何者だ？」

「貴方に名乗る名前は持っておりません。貴方は、警察の方ですか？」

「警察！？俺は、左正太郎。探偵だ！」

「これは、名前までご丁寧に……。」

ロングコートの男が指パツチンをするとサラリーマンが翔太郎の前に立ちはだかる。

「？」

「この男を処分しなさい」

白いコートの男が先ほどと変わらぬ口調で部下らしいサラリーマンに告げる。

「はっ」

「あっ！待て！」

廃工場の奥へと向かいはじめた男、翔太郎が追いかけようとするとサラリーマンが行く手を阻む。

「お前ら、何をしたんだ！？」

「あなたには知らなくていいことなのです」

翔太郎とサラリーマンが対峙する。

「あれ？左さん、何やってるんだろう？」

丁度、サラリーマンの背後からやって来た映司だが、二人とも映司には気が付いていないようである。

「この『カイザ』の力……使わせていただきますっ！」  
「ベルト……？ドライバーか？」

サラリーマンが何やら金属製のベルトを腰に装着し、見たこともない携帯電話を取り出す。

携帯電話を操作したかと思うと

『Standing by・・・』

「変身！」

『Complete』

電子音と掛け声とともに彼の体に光るラインが駆け巡り――

黄色に光るラインを纏った黒い戦士が現れた。その顔は、『X』すなわちギリシャ文字の『カイ』を模しているようだ。

「変身だ、フィリップ！」

身の危険を感じた翔太郎がすでにダブルドライバーを装着し、メモリを構えている。

『了解だ、翔太郎』

『Joker』

「変身！」

『Cycine,joker』

すさまじい風と共にダブルが現れ、カイザと対峙する。

カイザというと、ミッションメモリーを引き抜き、ベルトについている『X』を模した形状のブレイガンに挿入、ラインと同じ輝きの刃を出現させた。

「それがこの街で有名な仮面ライダーダブル・・・ですか」

静かにカイザが逆手にブレイガンブレードモードを構える。

『これは、初めて見るドーパントだ』

「初めてとかそんなこと関係ねえ。リーチがある奴にはこれだな！」  
ダブルが灰色のメモリを取り出す――

『Burst mode』

「はっ！」

カイザが何かさせまいとブレイガンから光弾を放つ、それを素早く

側転で避けるダブル。

「ちっ！剣かと思ったら銃にもなるのかよ」

『翔太郎、ルナのメモリも使いたまえ。柔軟に対応しようじゃないか？それにしても、実に興味深い……。』

「わかつてら！」

『Runa, metale』

緑と黒から黄と灰色に変化し、背中に現れたメタルシャフトを構える。

「来な！」

「いわれずとも！」

距離があつた両者の間合いが一気に縮まり、シャフトとブレイガンが激しくぶつかる。

「……………」

「……………」

押し合う二人、このままこう着状態になるのかと思えばダブルのルナサイドからカイザにキックがみまわれる。

「ぐっ！」

ボディにキックを受け、錆びついた柱に叩きつけられたカイザが呻く。

『ボディーがガラ空きだったからね。君が何者かわからないけどこちらも本気で行こう。翔太郎？』

「ああ！」

押し合つた際に相手があまり戦闘に慣れていないと思ったダブル。一気に畳み掛けることにしたが――

「やはり、私にはこれは使いこなせないようです……………」

突然、相手が変身を解く

「あ？」

あまりのことに拍子抜けするダブル、だが男の顔に怪しい模様が浮かび上がるのを見た。

ベルトを投げ捨てた彼が灰色の異形へと変身したではないか！

その姿は、異形でありながら上半身は羽を模した鱗のようなもので覆われ、顔にするどい嘴があり、どこことなく鷲を彷彿とさせるものだ。

『こちらの方が身が軽い!』

「どうなつてんだよ、フリリップ」

『わからない……。でも、言えるのは――』

鷲の異形が襲い掛かってくる。さっきの姿とは比べ物にならないほど速い!

『ドーパントではない』

「マジで化け物か!？」

『化け物……。？我々はオルフェノク、人類の進化した形態なのです!』

オルフェノクと名乗った異形は、言葉を発するたび、その影に上半身のみの人間が写っている。

彼の素早い動きに翻弄され始めるダブル。無論、サイクロンジョーカーになればいいのだが、その暇さえない。

鷲のオルフェノク……。イーグルオルフェノクは鋭い刃の爪が付いた足で回し蹴りを繰り返す。

「シャッ!」

「くっ……。!この野郎!」

ダブルがメタルサイドからパンチを浴びせるがイーグルオルフェノクの上半身を覆う鎧のような羽によって思ったようなダメージを与えられない。

一撃は軽い攻撃でも重なりと恐ろしい、次第に動きにキレがなくなってくるダブル。

「これ、使わせてもらいます」

ダブルは映司が男のしていたベルトを拾いあげるのを見た。イーグルオルフェノクも同様にそれを目撃する。

「映司!？」

『何、仲間か!？』

「俺の探してたベルトと違うけど・・・」  
ベルトを腰に装着させる。

『馬鹿め、それを使えるわけが・・・!』

「助けることができるのに手を伸ばさなきゃ死ぬほど後悔する・・・」  
「!」

「それが嫌だから——」

「俺が変身する!——!」

『Standing by・・・』

「  
变身!  
」

#### 第四話 「Kのベルトノ落し物はどこにある?」 (後書き)

映司は果たして変身するのか!?

なぜ、風都にオルフェノクが……? 彼らは何を知っているのか・  
・・?

謎が謎を呼ぶ!

次回は『とある街の電波放送』お楽しみに!

## 番外編 その1

??? 「風の吹き抜ける街、風都のラジオスタジオからこんにちわ！」

??? 「こんちわ！」

映司「えーっと、どさくさでカイザに変身しようとしている火野映司と・・・」

翔太郎「風都のヒーロー、ダブルの左側・・・左翔太郎がお送りするぜ！」

翔太郎「つていうか、なんだこのコーナー？」

映司「作者が息抜きに作ったコーナーで、ライダー同士で語らせるらしいですよ」

翔太郎「・・・・・・」

映司「どうしたんですか？」

翔太郎「いや、こんなコーナー作って遊んでるなら話のストック作っておけよって思ってた・・・」

映司「メタいですけど、正論ですね！」

翔太郎「ははは・・・、そういえば映司は何歳なんだ？」

映司「え？俺ですか？22歳です。」

翔太郎「（げっ！年上！？）」

映司「歳と言えば・・・。俺、よく実際よりも歳上に見られることがあるんですけど・・・老けて見えますか？」

翔太郎「い、いや・・・。そんなことないぜ」

映司「よかったあ」

翔太郎「（年上とは思わなかった・・・）じゃ、今回のお題に行くぞ！」

映司「はい、今日のお題は『バイク』です」

翔太郎「バイクか・・・」

映司「バイクと言えば・・・。左さんがダブルに変身して乗って、

空を飛んでましたね。」

翔太郎「あー。あれは、ダブル専用のバイクが変装した超音速航空機形態・・・その名も『ハードタービュラー』だ。」

映司「えっ！専用バイクってあるんですか!？」

翔太郎「もちろん、通常形態が『ハードボイルダー』、他にも変装した形態があるぜ」

映司「いいなあ・・・。俺、専用バイクなんかなくて（誰でも乗れるため）自動販売機とか虎にしか変形できないし・・・」

翔太郎「（自動販売機!？虎!？そっちの方がすごいような・・・）」

映司「そういえば、風都にはもう一人のライダーがいるんですよ？」

翔太郎「照井のことか・・・」

映司「その人にも専用バイクってあるんですか？」

翔太郎「あいつは特別でな・・・自分がバイクになって走るんだ。」

映司「ええーっ！走りたいときに走って便利ですね!」

翔太郎「（バイクになることはつつこまないのかよ・・・）そういえば、さっき自動販売機になるっていつていたよな？」

映司「はい」

翔太郎「何か飲み物とか売っているのか？」

映司「えーっと・・・。タカカンとか、バッタカンとか、トラカンとか・・・」

翔太郎「タカ、バッタ、トラ!？どんな飲み物だよ？」

映司「飲み物っていうより、道具です。タカちゃんは偵察、バッタはトランシーバーになりますよ」

翔太郎「って、今持っているんかい!」

映司「何かとよく使うんで一つずつ持っているんです。」

翔太郎「おお！変形した!」

映司「カワイイでしょ?」

翔太郎「ああ・・・。そういえば前回の話の中で一つ気になるこ

とがあるんだが」

映司「なんですか？」

翔太郎「あの携帯電話の使い方、なんでわかったんだ？」

映司「あー、それは後ろで見てたからです」

翔太郎「でも、携帯電話の操作は後ろからじゃうまく見えないだろ？」

映司「確かにほとんど見えませんが・・・手の動きとプッシュ音で大体わかります」

翔太郎「ホントか!？」

映司「あ！そんなこんなで時間がきてしまいました！」

翔太郎「おい、話そらすなよ！」

映司「左さんも何か言わないとこのコーナー終わっちゃいますよ？」

翔太郎「・・・このコーナーはどうだったか？つまらない茶番劇だったか？今後もあるかもしれないがその時は、よろしくな！」

映司「では、最後に次回予告です！」

## 番外編 その1（後書き）

### 次回予告

「『ジョーカーエクストリーム!』」

「俺は・・・乾巧。」

「は？お前、何も知らずに使ったのかよ」

「目の前の人を助けるために何も考えず、勢いとノリで・・・」

第五話 「The dead dance in city」

これできまりだ！

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4088x/>

---

平成ライダー大戦！？～時空を超える男たち～

2011年10月26日14時58分発行